

本興寺だより

令和五年
八月
第二四八号

「孝養に三種あり、衣食を施すを下品とし、父母の意に違はざるを中品とし、功德を回向するを上品とす。存生の父母にだに尚功德を回向するを上品とす。況や亡親においてをや」

(宗祖 十王讚歎鈔)

八月の盂蘭盆を迎えます。お盆は親族や親戚、親しい人々が集まって、亡き人を偲び、ご先祖に感謝し、供養する節目の時です。

家族が遠方にもいても、身近にいても、日頃会う機会は案外少ないものです。家族や親族の絆に想いを馳せて、また今生きている私達の命の源であるご先祖の御霊との宿縁に気付き、自身の命の尊さと有難さを見つめ直すことは大切だと云われます。

私達は生きている数十年の間に、大切な家族や親しい友人など、たくさんの人を見送ります。

死はいつも突然やってきます。例えある程度予期された場合であっても、「亡くなる前にもう一度会って話したかった」「臨終に立ち会いたかった」と言われた人を何人も聞きます。

それ故に、哀しみや喪失感からなかなか立ち直れない人もいます。故人との在りし日の、かけがえのない大切な思いを胸に秘めて生きる時、生前への感謝と

心の安らぎはもとより、亡き人の御霊の安らぎにも直結しているのだということです。

お盆は、お釈迦様のお弟子の目連尊者が、死後餓鬼の世界に落ちてしまった母親を救う供養の姿から始まり、日本では、推古天皇（五九二年即位）から宮中の正式な行事として始まり、現在に至っています。

「餓鬼」とは、仏様の説かされる地獄・餓鬼・畜生という三悪道の一つであり、生きている私達が陥りやすい心の世界です。嫉妬や貪りの心に苦しむ者のことです。自分本位の考え方の象徴が餓鬼であり、自分の欲にとらわれ過ぎると、求める大切なものを失うことに気付かないと云われます。

「餓」という字は我を食べると書きます。この餓鬼の心が、知らず知らずのうちに己の心を蝕んでいくということです。私達が、餓鬼をはじめ三悪道の心で生きる時、その心が御霊にも投影され、ご先祖も安らぎを得られないということが大事です。生者と死者が同時に仏の心持ちになることが大事だと。

お盆は目連尊者の母の供養を通して私達の心の邪鬼を見つめ直す時でもあります。

中古車販売大手のビッグモーターが紙面を賑わせています。あれだけの大きな組織で堂々と不正がまかり通っていて誰も止めなかったことに驚きますが、「赤信号、みんなで渡れば怖くない」人間はそういうところがあります。

自己中心、自社本位に偏り過ぎると法律・道徳の縛りが外れ、個人も会社も自分を滅ぼすのです。

「陰ながら家族を見守ってほしい」という願いの気持ちがあります。

亡き人に対する私達の想いや供養の気持ちは千差万別です。「魂が有るか無いか分からないが、肉親の情として感謝と供養の心を表すことは道徳的にも大切なことだから」という人もいます。また本当に御霊の存在を信じて、心から率先してされる人もいます。或いは「昔からの習慣だから・・・」という人も、なかには「俺は何時も心で先祖のことを思っているから何もしなくてもよい」と考えている人もいます。

生者から死者への一方通行の気持ちの問題だと考えている人もいますが、そうではないと仏様は云われます。



仏のご加護と、それを受け取れる、人の祈りの心も、また私達の供養の志と、それを感じ取れる亡き人の心も通じ合い一つに交わる（感応道交）（かんのうどうきょう）のだと云われます。

冒頭の文のように、日蓮聖人は、孝養（①親に孝行すること。②亡き親をはじめ死者を供養すること）に三種あると説かれています。親の生活を助けるのは最低限の孝養（下品）。父母の考えや思いを受け継いで生きたことは当たり前前の孝養（中品）。良い果報をもたらす善行をして分け与えるのが最上の孝養（上品）であると。存命の父母はもちろんのこと、亡き親に対する孝養がまして大事なことになるのだと云われます。私達の孝養の心、善行の生き方そのものが、自分の

盆踊りは、お盆に戻って来る祖霊の御霊を喜んで迎へ、皆で踊って楽しみ送る行事です。

夏の風物詩である各地の花火大会も、ただ美しいだけでなく、お盆の送り火の延長としての慰霊と感謝の意味もあります。

昔の人は、生者と死者は魂の境涯は違っても、祖霊と子孫も語り合えるのを肌で知っていた気がします。

法華経の中に、仏様は「佛の命も私達の命も常にここにあって滅しない。方便を用いて滅不滅の姿を示しているだけであるが、人はこれを素直に聞かず、信ぜずして、姿がなくなれば滅して何もなくなると思っている」と云われています。



「空」という仏様の教えがあります。空とは実体がない、或いは無という事ではなく、これは人は肉体の自分が本当の自分だと思っているが、本当の自分は霊的存在「空」なのだということなのです。

肉体の自分が本当の自分だと思うから煩惱や我欲に苛まれ、またこの世だけの命だと勘違いするのです。法華経は肉体の自分と霊的存在の自分を調和させて生きる教えです。

亡きご先祖にも、生前と同じように語らい、功をねぎらい感謝と供養することを忘れず生きる中で、必ず亡き人からの心の便りが来ていることに気付けるのだと説かれています。

お盆には家族そろってお参り頂きたいと思えます。合掌 本興寺住職 中 谷 聰 秀